



毎年ノーベル文学賞？などと騒がれている村上春樹、小説は「ノルウェイの森」しか読んでいないが、エッセイは好きなのでよく読む。3月に図書館で借りた「ラオスにいったい何があるというんですか？」はアイスランドやギリシャ、日本国内の紀行文である。ラオスに何があるかと私は別にどうでもいいんだけど（行ったことがある友だちの話ではラオスはハマるらしい）、熊本の旅行文はなかなか面白く読めた。「万田坑」に「SL人吉」！行ったことないし、うーん、これはぜひ行ってみたい。すぐ、夫に「熊本行こう」と声をかけたら、毎日が日曜日の夫は即、旅行プランを立ててくれて、満開の桜が散り始めた頃に熊本旅行へ行ったのだった。その熊本が1週間後に大きな地震に見舞われるとは、思いもしなかったのである。熊本城をはじめ周辺地域の早期復興を願うばかりです。

「不便さは旅行を面倒なものにするが、同時にまたそこにはある種の喜び一回りくどさをもたらす喜び一も含まれている」

旅行が趣味の私には、旅の計画も出かけることもちっとも面倒ではないけれど、行き慣れていないと、「行きたい」と思いながらもなかなか実行に至らないのかもしれない。交通の不便なところを乗り物を乗り継いで歩くと、たとえ効率が悪くても、達成感とともにしっかり記憶に残る。同じ旅行でも旅行社お任せツアーなどは、行程や内容を忘れてしまうことが多い。登山にしろ海外旅行にしろ、私らくらいの歳になると、必要なものは体力がいちばんだと実感する。足と頭を使ってがんばる旅行ができるのもあと10年余りかと思うと、あそこも行きたい、ここも行っておかんと…と焦ってくる。(笑)

そして、たとえ、訪れた場所が少々期待外れであろうと、なんやねんなあ？と感じようと全く悔いはない。行ってみるとわからへん。

スケール感というかその場の空気感みたいなものは自分の目と鼻と足と中途半端な耳で確かめないとわからない。

「特別な光、風、誰かの声、心のふるえを思い出せる。それがただの写真とちがうところだ。たいして役に立たないまま、ただの思い出として終わってしまうのかもしれない。それが旅というものではないか、それが人生というものではないか」春樹さんも言う。

そんなに文学的な感慨は抱けなくとも、知らないものを見て、美味しいものを食べて、ゆっくり温泉に浸かって、日常の生活を忘れられるひとときを過ごせるだけで幸せである。

熊本旅行は別府でレンタカーを借りて別府の地獄めぐり、湯布院、黒川温泉、阿蘇、熊本、人吉と周った。レンタカーのカーナビ頼りに荒尾市万田坑までたどり着いたら、崩れそうな煉瓦の炭鉱遺跡は、青空とまばゆい陽光の中でのどかに、周囲から忘れられたかのようにひっそりと佇んでいる。日本の近代化に貢献した万田坑は、軍艦島などと共に産業遺産として、2015年にユネスコ世界遺産に登録された。春樹さんは「実際に世界遺産になったら、もっともっと激しく揺すり起こされるだろう」と書いていたが、私が訪れた4月8日はええっ！これが世界遺産？な感じで、観光客もちらほら、案内ボランティアのおじさんがヒマそうだった(笑)少し話を聞いた中で、「万田坑は周囲にボタ山がありません」鉱脈から掘り出したものの半分は石炭にならずボタ山となっていくが、ここの石炭は非常に質が良かったからだという。歴史にあまり興味のない私は炭鉱の解説も読み飛ばして、春樹さんが褒めていた明治時代の古いレンガ建屋のアーチ型窓を撮ったりして楽しめた。

翌日、最後のお目当てのSL人吉に乗車したが、前夜の夕食に当たったのか、下痢と嘔吐で体力消耗した私は座席にぐったりと座り込み、ぼんやりと窓から流れる春景色を見ていただけだった。それもまた旅である。

『ラオスにいったい何があるというんですか？』  
村上春樹 文芸春秋